

第6章 体験格差と学力・非認知能力

平田 誠一郎

とよなか都市創造研究所 研究員

<目次>

1. はじめに
2. 豊中市の児童生徒における「体験」の状況
3. 体験と授業理解度の関係
4. 体験と非認知能力の関係
5. 習い事や文化的経験の影響に関する統計的分析
6. まとめ

1. はじめに

本章では、学習のほかに子どもたちの成長に重要な役割を果たすと考えられる文化などに関する体験について取り上げる。折しも昨今、「体験格差」という言葉が注目を集めている。今井悠介は自身らが行った全国規模の調査において、子どもの学校外の体験を33項目に分類し、小学生の保護者に対し直近1年間でのそれらの体験の有無を尋ねた結果について述べている(今井2024:18-76)。ここでの学校外での体験とは、「放課後の体験(定期的に行う活動)」の「スポーツ・運動」「文化芸術」、「休日の体験(単発で行う活動)」の「自然体験(キャンプ、海水浴など)」「社会体験(農業体験、ボランティアなど)」「文化的体験(動物園、博物館、音楽鑑賞など)」に大別されているが、これらの体験について世帯収入により大きな格差のあるこ

とが今井によって報告されている。その報告によれば、1年間の間にこれらの体験が一つもない「体験ゼロ」の割合が、世帯年収300万円未満では29.9%であるのに対し、世帯年収600万円以上では11.3%と2.6倍の格差があるという(今井2024:30)。各種の習い事はもとより、休日のレジャーに至るまで、収入による体験格差の広がりのあることがここからわかる。

芸術文化体験が社会階層に大きな影響を受けていることは、従来から文化に関する社会学的研究では通説であった。しかし上記の体験格差に関する報告はより広範な範囲での体験が本プロジェクトでも焦点の1つとなっているSESの制約を受け、格差が広がっていることを物語るものである。本プロジェクトでもアンケート設計上、限られた質問数ではあるが文化など体験の頻度について、保護者アンケートで尋ねている。そこで本章では、上述のような状況も見

据えながら、本市での子どもたちの体験格差とその影響について考察していきたい。

具体的には、下記の通りに議論を進めていく。保護者アンケートにおいて、子どもの習い事、子どもとともに文化施設（美術館など）に行く頻度を尋ねている。これらの結果が、SESとどのように関わっているのかを調べるために、行政データから得られた家庭SESとのクロス集計を行った。またこれらの結果が、子どもたちの授業理解度や非認知能力とどのように関連しているかを次に検討した。

その結果をおおまかにいえば、体験の頻度はSESが高いほど多く、学力・非認知能力も体験の頻度が高いほど高い。やはりSESによる規定力が大きいと思われる。しかしSESによる制約があったとしても体験自体は子どもたちの成長に良い影響を与えることも既存の研究によって報告されている¹。そこで、家庭SESやその他の要因の影響を取り除いたうえで体験の影響をみるために統計的分析を行った。またこれらの議論の付論として、SESによる制約が厳しい層において、無料の遊びや読書の場の利用が非認知能力にどのように関連しているかをクロス集計にて検討した。

なお統計的分析に際し、本章でもこれまでの章と同様、統計的検定に基づく有意性の有無を図表に記している（***：0.1%水準、**：1%水準、*：5%水準、+：10%水準）。

2. 豊中市の児童生徒における「体験」の状況

2-1. 習い事の状況

子どもたちの学校外の主要な体験の場である習い事については、保護者アンケートで10項目について尋ねている。紙幅の都合もあり、ここでは回答数の多い「学習塾（家庭教師を含む）」「音楽」「スポーツ」と「その他」（「習字」「そろばん」「英会話など語学教室」「絵画などの芸術」「バレエ・ダンス」「その他」の回答を集約した）の4項目の結果を示す。同様の調査を初年度である令和5年度（2023年度）から続けて行っており、昨年の調査研究報告では体験について取り上げていなかったため、2年分の結果を併記して示すこととする²。

まず「学習塾（家庭教師を含む）」について図表6-1に示した。いずれの年においても、習っていることを選択する割合は学年が進むにつれどのSES層でも高くなっていく。中1では全体の7割近くが学習塾（家庭教師を含む）を習い事として選択している。SESとの関連を見ると、どの学年においてもSESが高くなるにつれ習い事として選択する割合が増えていく。

次に「音楽」については、図表6-2の通りである。両年とも学年が上がるにつれて習う人の割合が減少している。学年上昇の影響か、令和6年（2024年）で全体的に割合が少ない。また2年とも各学年でSESが高くなるにつれて習っている割合が上昇する傾向がある。

¹ 例えば文部科学省の「令和2年度「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」」では、収入の水準が相対的に低い家庭の子どもも、自然体験の機会に恵まれていると、その後の成長に良い影響が見られるとの調査結果を明らかにしている（文部科学省2021）。また同調査については株式会社浜銀総合研究所（2021）にて詳述されている。

² 令和5年度（2023年度）、令和6年度（2024年度）のデー

タを年度ごとに集計したものを併記している。したがって、それらは同一の対象者を追跡したパネルデータではない。ちなみに2年間にわたって回答があり、パネルデータ化できたケースについてみると、通塾以外の習い事を1つ以上している場合は、翌年も1つ以上通塾以外の習い事をしていく割合が高い。ただし学年が上になるほど通塾を除く習い事が0になる割合が増えていく。

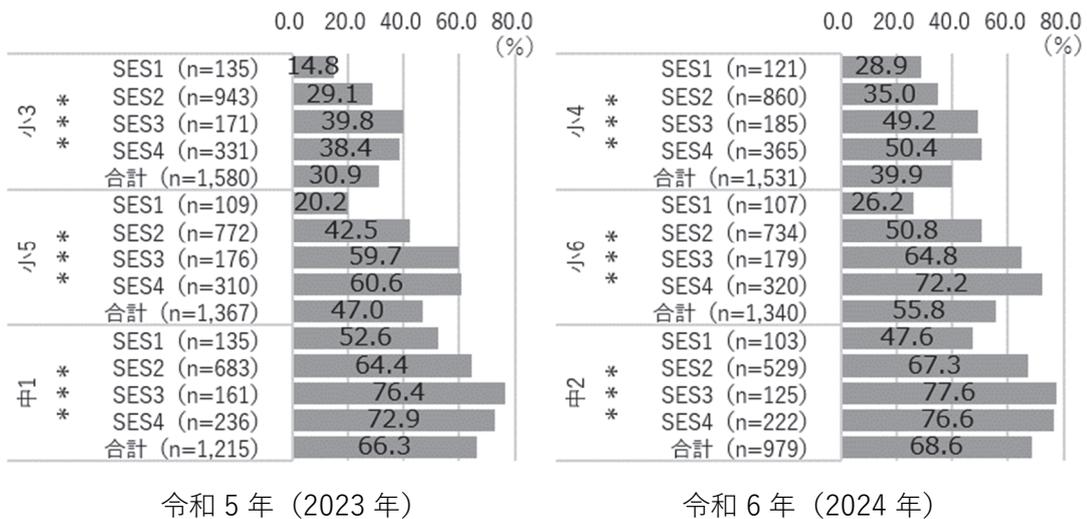
第6章 体験格差と学力・非認知能力

3つ目は図表6-3の「スポーツ」である。上の2種類に比べ、全体として習っている人の割合が多いのが特徴である。両年とも学年が上がるにつれ習っている人の割合は減少していく。「学習塾（家庭教師）」や「音楽」に比べSES間での割合の差も少ない。

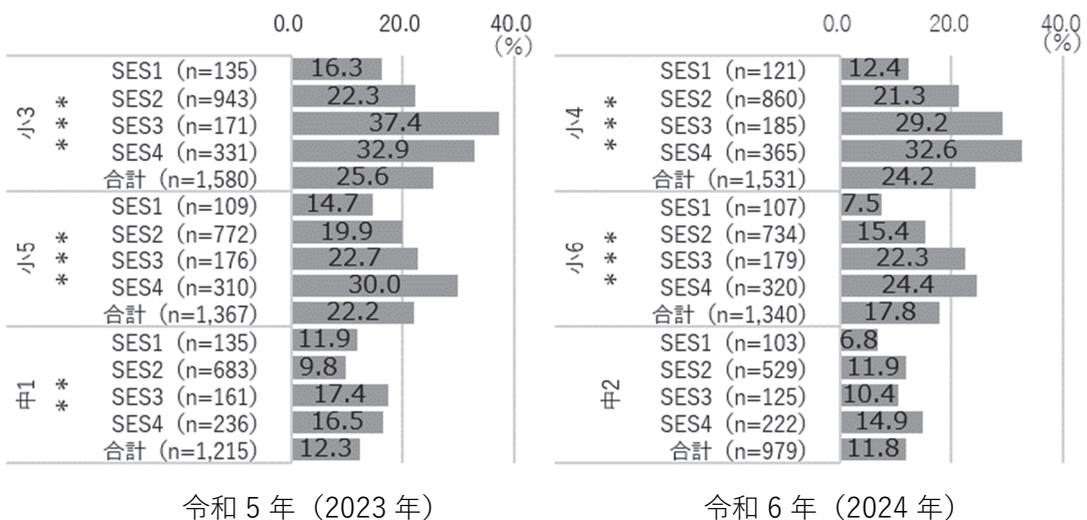
4つ目の図表6-4は上記の3種類以外の習い事について、そのうち1種類以上をしている人の割合である。両年とも、他の習い事と同様学

年上がるにつれて習っている人の割合が少なくなっている。SES1とSES2以上との間に習っている人の割合の差が見られる。

習い事に関しては、習っている人の割合が学習塾（家庭教師）は学年が上がるにつれ増加し、それ以外は学年が上がるにつれ減少する傾向があるとともに、SESによる差は学年が上がるにつれ少なくなっている。また概ね統計的に有意性のある結果である。

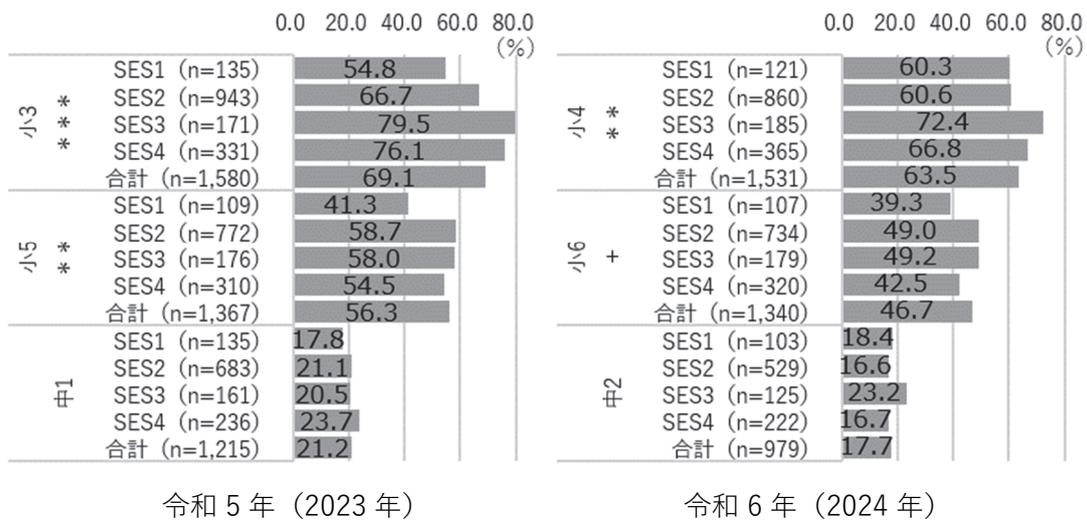


図表6-1 習い事：学習塾（家庭教師を含む）家庭SES別集計

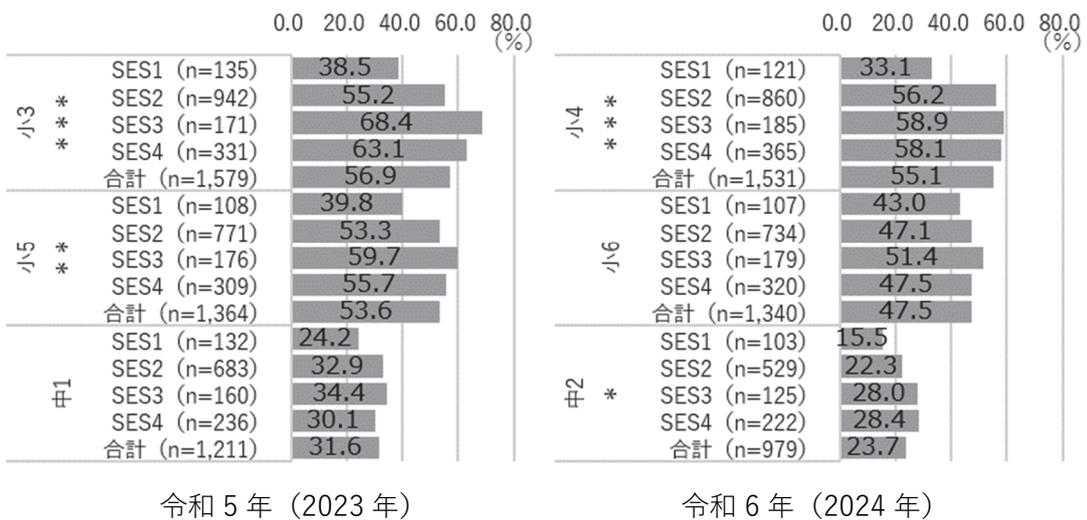


図表6-2 習い事：音楽 家庭SES別集計

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅱ



図表 6-3 習い事：スポーツ 家庭SES別集計



図表 6-4 習い事：その他 家庭SES別集計

2-2. 文化施設の利用回数

次に文化経験について、文化施設の利用回数をもとに述べる。ここでは紙幅の都合もあり令和6年（2024年）のみのデータを示す。一般に芸術・文化との関わりはSESと相関すると考えられるが、以下の集計においてもSESが高くなれば文化経験も増えることがわかる。図表6-5は保護者アンケートにおいて、「子どもと一緒に美術館や劇場に行く回数」を尋ねたものである。頻度の高い項目は回答割合の少ない

項目もあり、集計に際しては「月1回以上」「2～3か月に1回程度」「半年に1回程度」の項目をまとめて「半年に1回程度以上」とした。

「半年に1回程度以上」「1年に1回程度」の合計した割合を見るとSES2以上がSES1に対して割合が大きく、SESが高くなるほど比較的多い回数を示す人の割合が増える傾向がある。

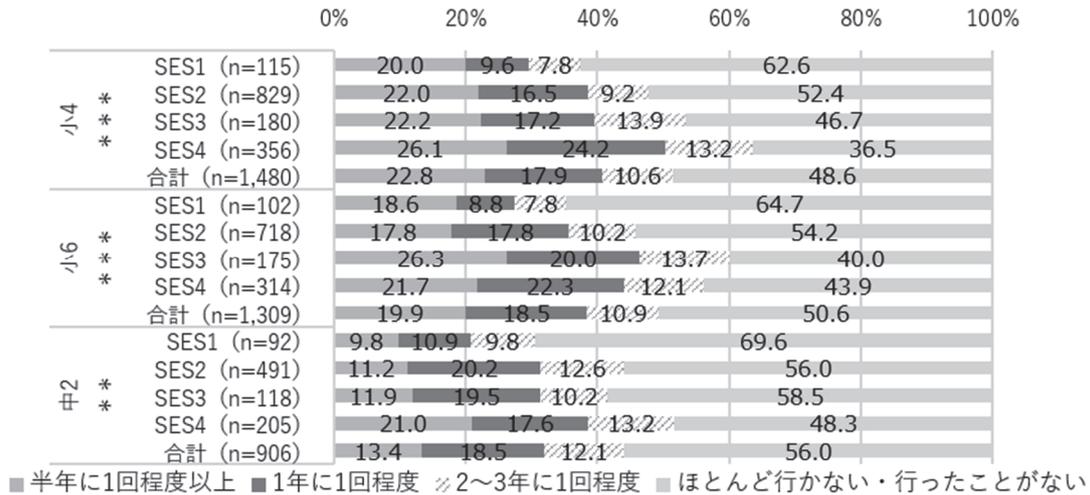
図表6-6は同じく保護者アンケートで「子どもと一緒に博物館・科学館に行く回数」を尋ね

第6章 体験格差と学力・非認知能力

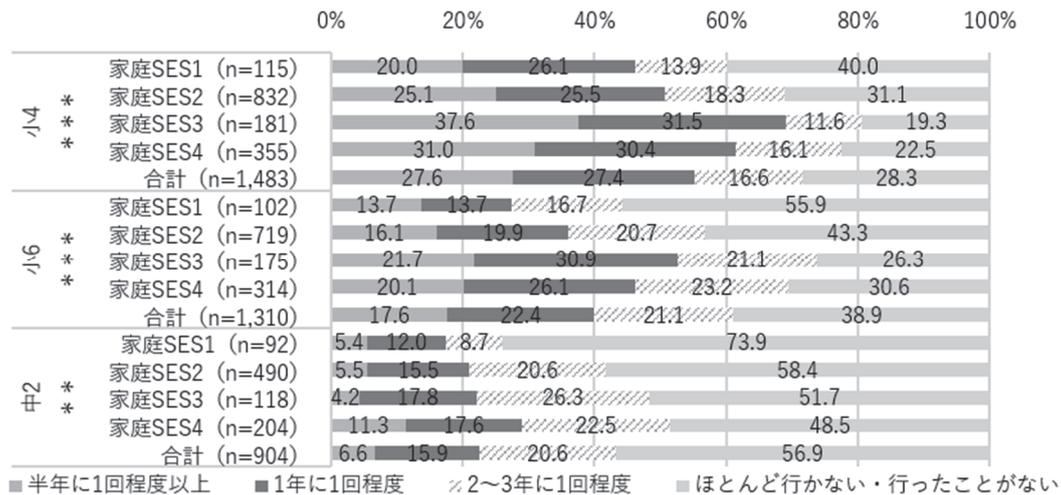
たもので、「半年に1回程度以上」「1年に1回程度」の合計に着目すると、特に小学生のSES3・SES4で、頻度の高い人の割合が多い。

図表6-7は保護者アンケートで「子どもと一緒に図書館に行く回数」を尋ねたものである。上記と同じく「半年に1回程度以上」「1年に1

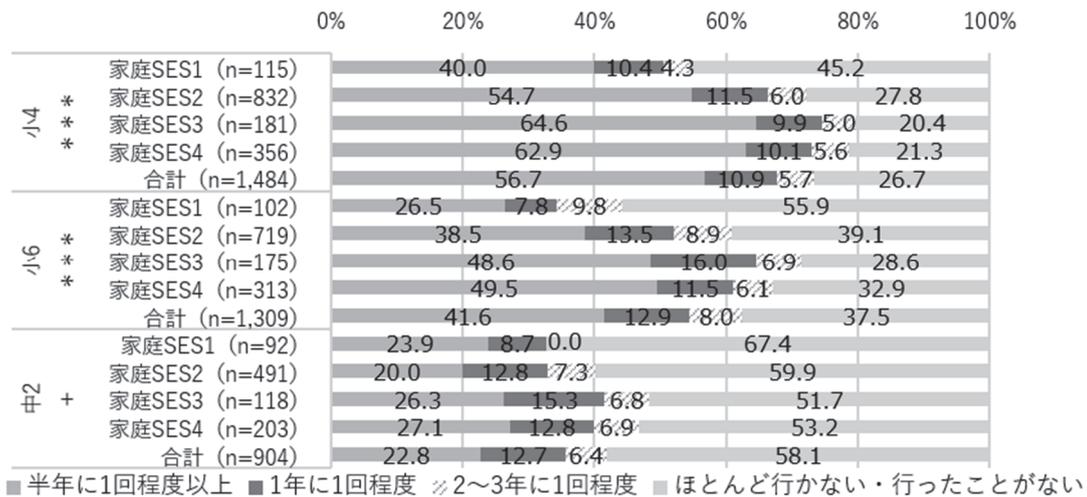
回程度以上」の合計に着目すると、「美術館・劇場」や「博物館・科学館」に比べ全体に頻度が高い人の割合が多くなっている。SESとの関連では、特に小学生でSESによる差が見られ、SES1、SES2、SES3・4の順で割合が増えていくという結果が出ている。



図表 6-5 (保護者) 子どもと一緒に美術館や劇場に行く回数



図表 6-6 (保護者) 子どもと一緒に博物館・科学館に行く回数



図表 6-7 (保護者) 子どもと一緒に図書館に行く回数

3. 体験と授業理解度の関係

3-1. 習い事と授業理解度

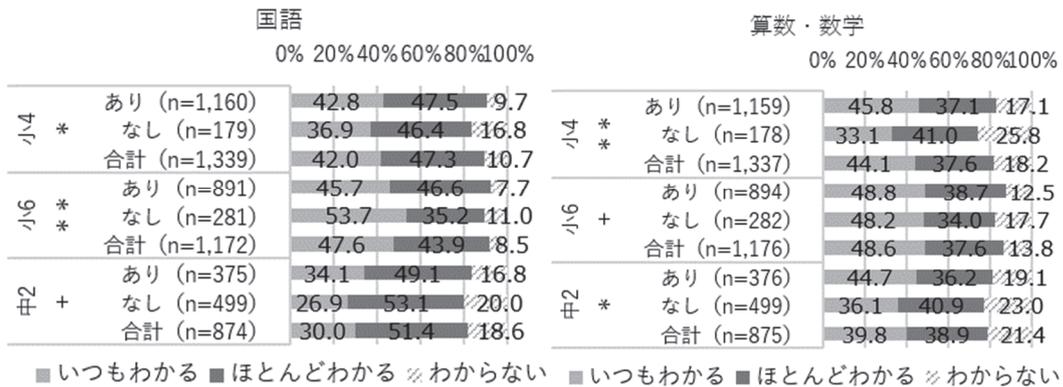
以上では、児童生徒の体験の状況について、習い事、文化経験とSESの関係からみてきた。それでは、このような体験の状況はどのような影響を持っているのであろうか。体験は子どもたちにとって、人格形成にとって重要な影響力を持ち、学力や非認知能力など様々なスキルを育む基盤となりうるものである。そこで、ここでは体験と学力の関係を検討し、次節では非認知能力との関係を検討することとしたい。アンケート調査では学力に関わる設問として授業理解度について尋ねている。この授業理解度が習い事や文化経験の有無とどのように関わっているかを以下に示すこととする。

図表 6-8 は習い事 (通塾以外) の有無と国語、算数・数学の授業理解度についてまとめたものである。通塾は学力への影響が大きいですが、通塾以外の「体験」を中心とした習い事と学力の関

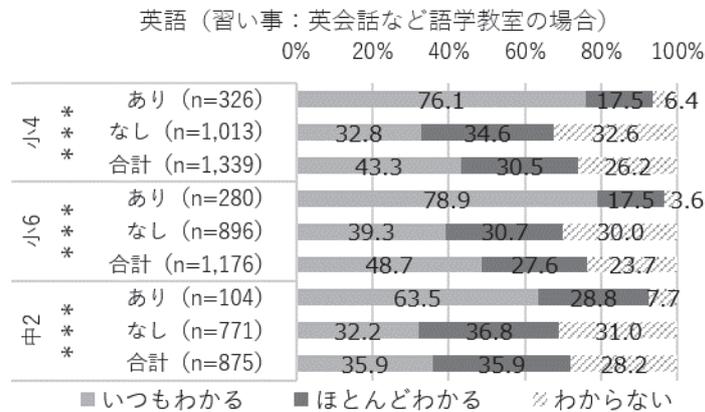
係はどのようなであろうか。児童生徒アンケートでは授業理解度について「いつもわかる」「ほとんどわかる」「半分くらいわかる」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」の5件法で尋ねているが、情報を縮約するため上述のうち後ろ3件を「わからない」に統合して集計している。また習い事については通塾以外の習い事を1種類以上している場合を「あり」、それ以外を「なし」とした。

国語では通塾以外の習い事について「あり」の群が「なし」に比べて、各学年とも若干ではあるが理解度が高い。算数・数学についても同様である。

図表 6-9 は英語の授業理解度についてまとめたものである。英語については「英会話など語学教室」という直接的に関連する習い事の項目があるので、このケースに該当する場合に限定して集計した。いずれも「あり」の群で理解度が高い。



図表 6-8 習い事（通塾以外）の有無と授業理解度



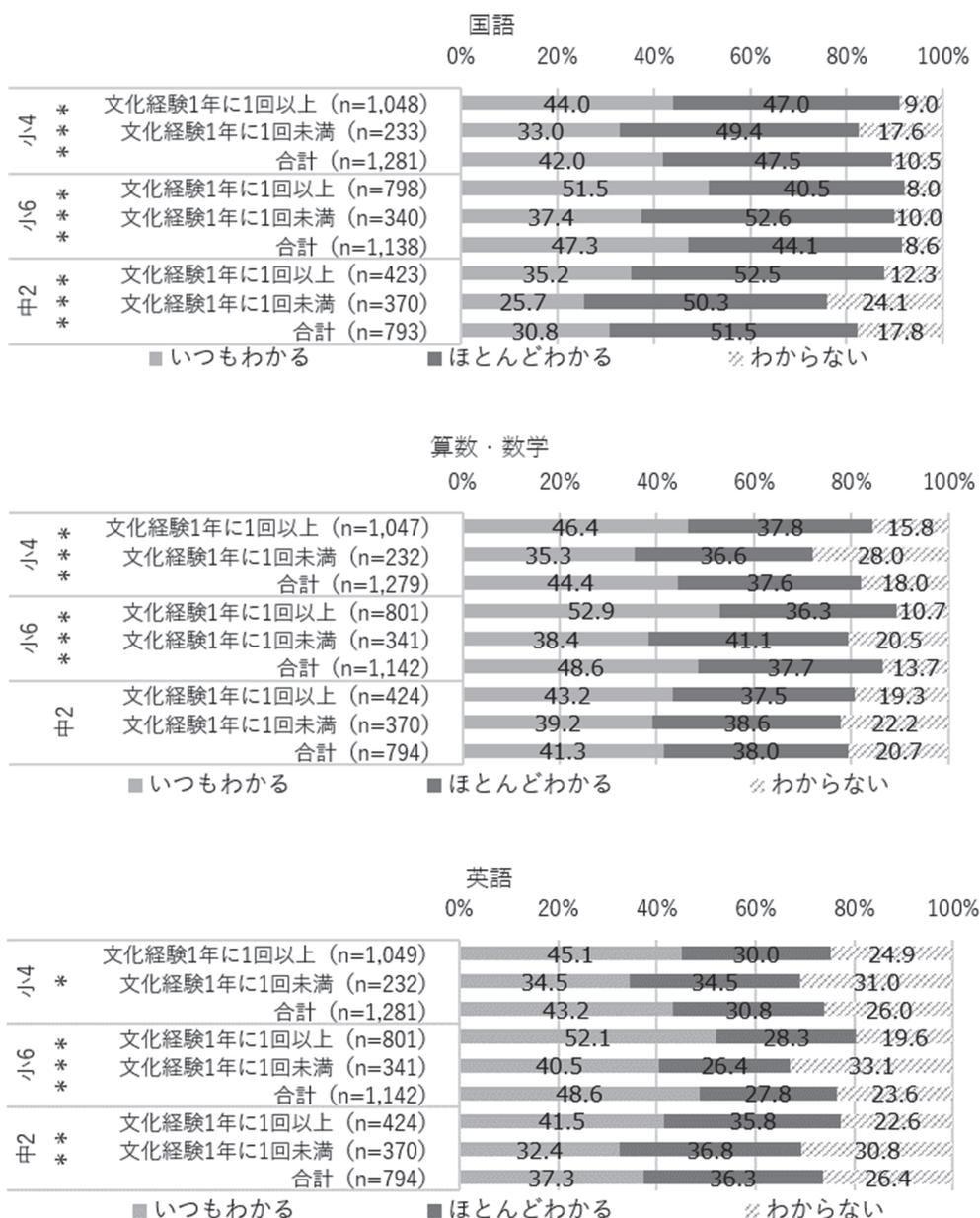
図表 6-9 習い事（英会話など語学教室）の有無と英語の授業理解度

3-2. 文化経験と授業理解度

次に文化経験の頻度と授業理解度についてまとめた結果を示す。文化経験については前節で示した「保護者が子どもと一緒に文化施設を利用する回数」のデータを用い、「美術館・劇場」「博物館・科学館」「図書館」のいずれかについて

て1年に1回以上利用のある群とそれ以外の群に分けて集計した。

図表 6-10 によれば、国語、算数・数学、英語のいずれについても文化経験1年1回以上の群が理解度が高い。また中2の数学を除き統計的に有意な結果となっている。



図表 6-10 1年に1回以上の文化経験の有無と授業理解度

4. 体験と非認知能力の関係

4-1. 習い事と非認知能力

次に、非認知能力についてみていく。非認知能力は自己肯定感ややり遂げる力、多様性を認める力や協調性など多岐にわたるスキルからなっている³。ここでは、習い事や文化経験が

ポジティブな影響を与えているスキルについて、統計的有意性が確認できたものを中心に示していく。まずは通塾を除く習い事の有無との関係から確認することとする。

図表 6-11 は、通塾以外の習い事の有無と非認知能力の関係を示したものである。最初に挙げた「自分でやると決めたことは、やりとげる

³ 非認知能力全般に関しては小塩（2021）を参照されたい。

第6章 体験格差と学力・非認知能力

ようにしている」は、非認知能力の中でも「やりとげる力（グリット）」に関係するものであるが、小4、中2で「習い事あり」の群のほうが「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答える割合が多く、統計的にも有意である。ただし小6では有意な結果はみられなかった。

次の「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している」でも「習い事あり」群が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の割合が多く、いずれの学年でも有意な結果となっている。習い事への取り組みと挑戦心との間に関連のある可能性が考えられる。

他者受容を表す「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という項目では中2で2群の差が特に大きく、「習い事あり」群が肯定的回

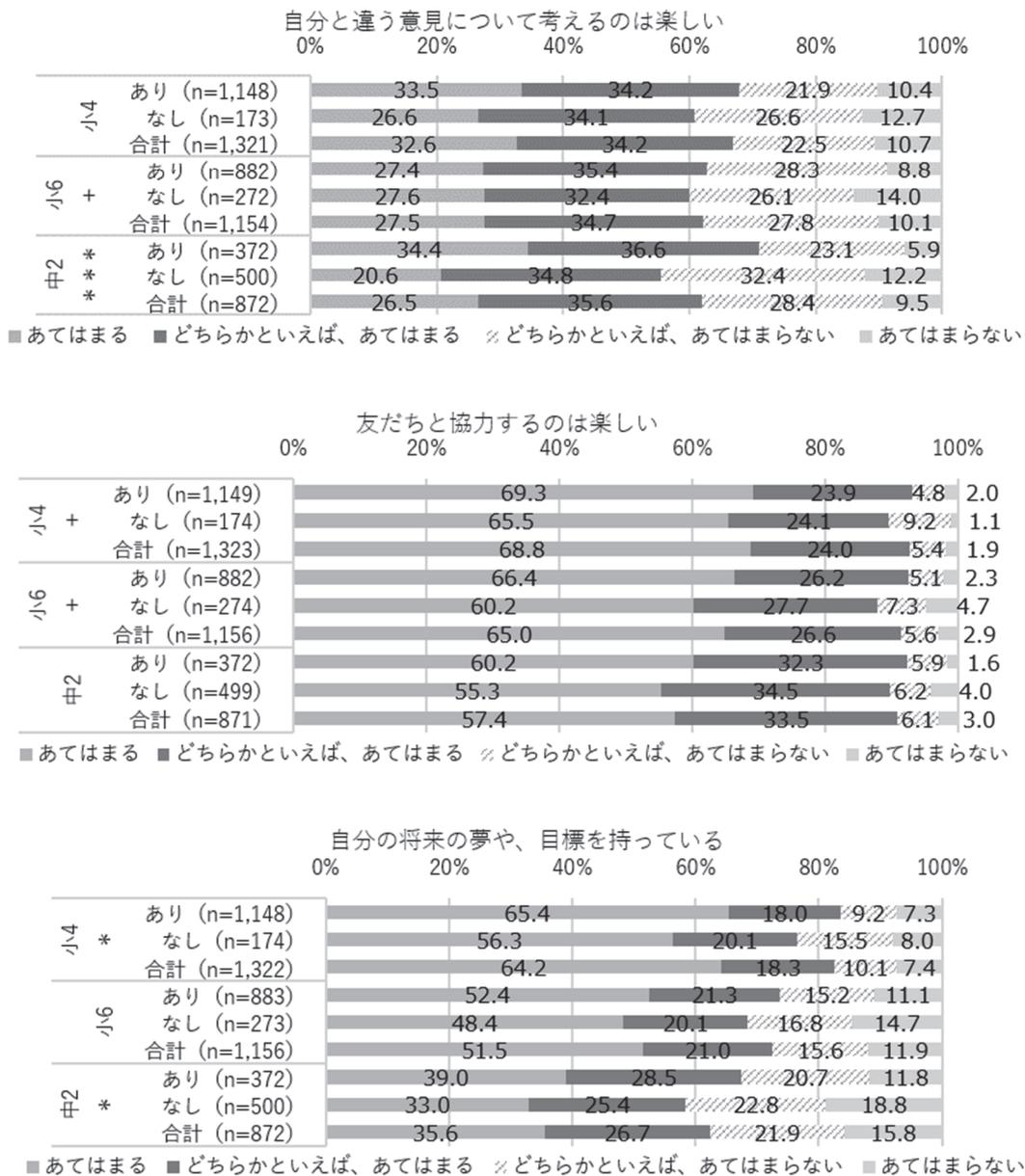
答をする割合が高い。中2、小6で有意な結果である。

協調性を示す「友だちと協力するのが楽しい」という項目では、小4、小6で有意な結果となっており、「あてはまる」という回答をする割合が「習い事あり」群で多くなっているのに対し、「どちらかといえばあてはまる」では差がないか、「習い事なし」群で多くなっている場合がある。

最後の「自分の将来の夢や目標を持っている」では小4と中2で有意な結果であり、これも「あてはまる」という回答をする割合が「習い事あり」群で多い。「どちらかといえばあてはまる」については小4で差が少なく、小6では「習い事なし」群で多くなっている。



調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅱ



図表 6-11 習い事（塾以外）の有無と非認知能力

4-2. 文化経験と非認知能力

次に、文化経験と非認知能力の関係についてまとめた結果を示す。授業理解度の場合と同様、文化経験の頻度については保護者が子どもと一緒に施設を利用する頻度のデータを利用して「1年に1回以上／未満」に分けた。そのうえで以下の図表 6-12 の通りに、非認知能力との関係を確認した。統計的有意性の有無の状況を考慮し、ここでは以下の3つの項目について示

すこととする。

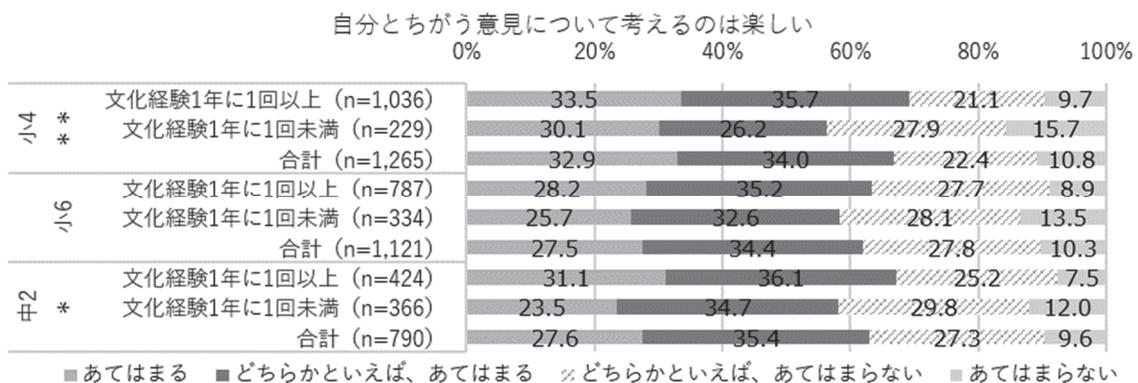
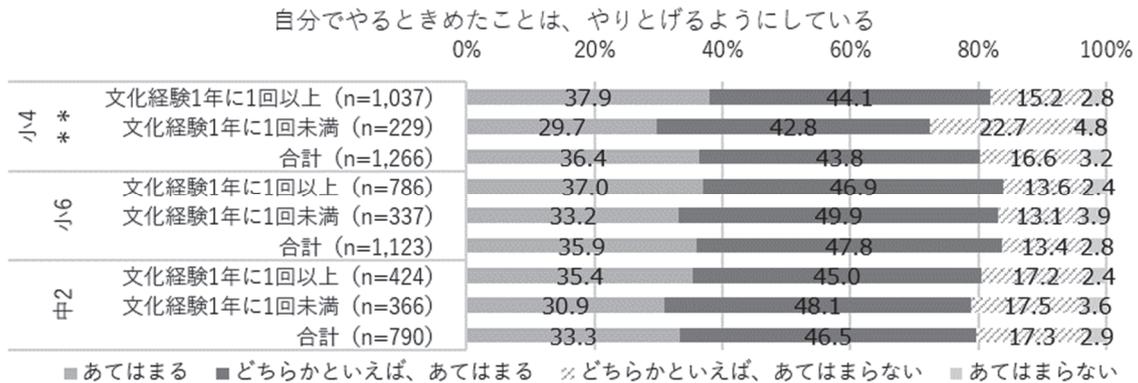
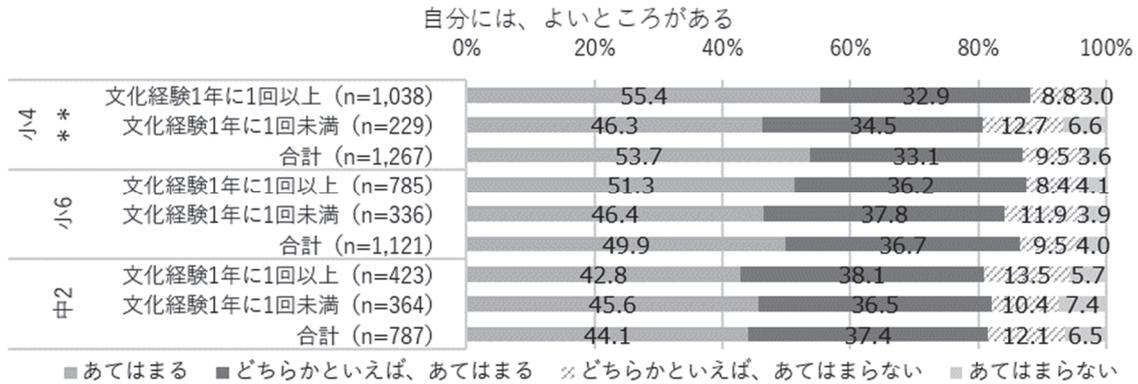
自己肯定感を示す「自分には、よいところがある」という項目に関しては、小4において有意性が確認できる。文化経験1年に1回以上の群で自己肯定感が相対的に高い。

「自分でやるときめたことは、やりとげるようにしている」という項目では小4にのみ有意な結果が出ている。こちらも文化経験1年に1回以上の群で肯定的回答が多い。

第6章 体験格差と学力・非認知能力

「自分とちがう意見について考えるのは楽しい」という項目においては小4と中2において

有意な結果となっている。いずれも文化経験1年に1回以上の群で肯定的回答が多い。



図表 6-12 文化経験の頻度と非認知能力

5. 習い事や文化的経験の影響に関する統計的分析

以上の状況をまとめると、習い事や文化体験はSESの影響が強く、習い事があることや文化経験の頻度が相対的に高いことは、授業理解度の高さにも影響している。また非認知能力との関係においても習い事はやりとげる力や挑戦する力と将来の夢や目標、文化経験は他者を受容し多様な意見を受け入れることなどと関連している。このような体験は子どもたちの様々なスキルを育む機会であるが、そこに存在する問題が冒頭に述べたSESによる体験格差なのである。

もちろんSES自体が学力や非認知能力に関連していることはこれまでの本プロジェクトの研究によって確認されており、上述の結果はその影響もあるだろう。そのうえで、体験によって子どもたちがこれらの能力を伸ばす機会もまたSESによる格差が制約となっているのである。しかしながら体験の場合は、遊びなど特別な予習を必要としないものもあり、また芸術文化の受容にも学習とは異なり人の感覚に直接訴える部分がある。取り組む内容次第ではSESによる制約というハードルを比較的に下げやすいものがあるのではないだろうか。こうした観点も踏まえて、以下では、習い事や文化経験に加え、通塾や学習時間、学校・家庭以外の居場所の有無、家庭や学校でのポジティブ経験の有無、SESといった様々な要因が学力、非認知能力に及ぼす影響をまとめて統計的に分析する。このことで、文化経験や習い事といった体験自体が独自に持つ（その他の要因に左右されない）影響力を確認したい。

図表6-13は授業理解度でも相対的に大きな差がみられる算数・数学についての結果を従属変数として、アンケートで尋ねた通塾を除く習い事と1年に1回以上の文化経験（前節までの分析と同様の算出方法による）、通塾や家庭教師についていること、学習時間、家庭や学校でのポジティブな経験⁴、そして行政データから得られた家庭SESが最も制約のある1であることを独立変数とし、独立変数が従属変数に与える影響力を分析した結果である。

ここでは従属変数である算数・数学の理解度をアンケート回答の「いつもわかる」「だいたいわかる」をまとめた「わかる」と「半分くらいわかる」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」をまとめた「わからない」の二値として情報を縮約したうえで、それぞれの独立変数が「わかる」という結果に対してどの程度の影響力を及ぼすかを分析した。同様の分析手法を第5章の4-2においても採用しているので合わせて参照されたいが、ひとことでいえば、それぞれの要因が算数の授業理解度にどれだけ寄与しているかを示すものである。

図表の中では、オッズ比の欄の数値が影響力を表す指標である。オッズ比が1を超えればプラスの影響力、オッズ比が1を下回ればマイナスの影響力があり、係数の欄に記号が付されていればその変数の影響力は統計的に有意である。以下学年順に結果を述べる。

小4では、文化経験、通塾・家庭教師、学習時間、ポジティブ経験のオッズ比が1を超えており、統計的にも有意であることからこれらがプラスの影響力を持っているといえる。以下同様に、小6では習い事（通塾以外）をしている

⁴（「あなたが話すことを、おうちの人はしっかりとしっかりと聞いてくれる」「あなたが困ったときは、おうちの人が絶対に助けてくれる」「学校で過ごすのは楽しい」「あなたが困ったときは、友だちが絶対に助けてくれる」「親のほかに、あなたのことを心配してくれるおとなの人がいる」

「地域で行われるお祭りやイベントによくいく」という項目に対して「あてはまる」あるいは「どちらかといえば、あてはまる」と答えた数を合計して点数化したものである。ポジティブ経験について詳しくは第8章を参照されたい。

第6章 体験格差と学力・非認知能力

こと、文化経験、学習時間がプラスの影響力を持っており、家庭SESが1であることはマイナスの影響力となっている。中3では習い事や文化経験の影響力は確認できなかった。このことを考え合わせると、たとえSES等他の要因を考慮したとしても、授業理解度に関しては小学生で文化経験そのものにプラスの影響力があり、小6については習い事について同様に影響力があるということである。

非認知能力についても確認していく。以上と分析の手法は同様であるが、図表6-14は自己肯定感⁵を従属変数とし、授業理解度の場合に独立変数としていた通塾・家庭教師と学習時間

を「家庭・学校以外に居場所があること」に変更した。その他の独立変数は授業理解度と同様である。ここでは、小4で習い事と文化経験にプラスの影響力が確認されている。その他の変数では全学年でポジティブ経験や居場所にプラスの影響力のあるケースが多い。

図表6-15はやりとげる力⁶に関する分析である。ここでも小4で習い事と文化経験にプラスの影響力が認められるが、中2でも習い事がプラスの影響力となっている。いずれにしても、学年により異なるところはあるが授業理解度や非認知能力について、文化経験や習い事がプラスの影響力を持つケースが一定数確認できる。

図表6-13 授業理解度（算数・数学）を従属変数としたロジスティック回帰分析

	小4		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-1.596 ***	.435	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.310	.235	1.363
文化経験(1年1回以上)	.544 **	.183	1.723
通塾・家庭教師	.635 ***	.185	1.887
学習時間(分)	.011 ***	.002	1.011
ポジティブ経験(0-6点)	.309 ***	.069	1.361
家庭SES	-.310	.274	.734
疑似決定係数(Nagelkerke)	.140		
N	1244		
*p<.10, *p<.05 **p<.01 ***p<.001			
	小6		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-.254	.495	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.500 *	.212	1.649
文化経験(1年1回以上)	.508 **	.188	1.663
通塾・家庭教師	.121	.203	1.129
学習時間(分)	.012 ***	.002	1.012
ポジティブ経験(0-6点)	.130	.085	1.139
家庭SES	-1.023 ***	.262	.359
疑似決定係数(Nagelkerke)	.140		
N	1117		
*p<.10, *p<.05 **p<.01 ***p<.001			
	中2		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-.503	.441	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.110	.185	1.116
文化経験(1年1回以上)	.109	.184	1.115
通塾・家庭教師	.652 **	.209	1.919
学習時間(分)	.004 *	.002	1.004
ポジティブ経験(0-6点)	.212 **	.078	1.236
家庭SES	-.485 *	.280	.616
疑似決定係数(Nagelkerke)	.073		
N	781		
*p<.10, *p<.05 **p<.01 ***p<.001			

⁵ 自己肯定感についても分析のため二値の変数に情報を縮約している。「自分にはよいところがある」という設問に対し、「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」が「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」「あては

まらない」が「あてはまらない」となっている。

⁶ これも「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている」という設問への回答を二値に縮約したものを従属変数としている。

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅱ

図表 6-14 自己肯定感を従属変数としたロジスティック回帰分析

	小4		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-1.763 ***	.449	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.507 *	.250	1.661
文化経験(1年1回以上)	.515 *	.209	1.673
ポジティブ経験(0-6点)	.492 ***	.077	1.635
居場所	.594 **	.188	1.812
家庭SES	-.355	.308	.701
疑似決定係数(Nagelkerke)	.126		
N	1231		
*p<.10, **p<.05 ***p<.001			

	小6		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-1.666 ***	.423	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.150	.217	1.162
文化経験(1年1回以上)	.299	.202	1.348
ポジティブ経験(0-6点)	.526 ***	.078	1.692
居場所	.966 ***	.195	2.628
家庭SES	.164	.366	1.178
疑似決定係数(Nagelkerke)	.160		
N	1092		
*p<.10, **p<.05 ***p<.001			

	中2		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-1.613 ***	.422	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.279	.203	1.321
文化経験(1年1回以上)	-.231	.202	.793
ポジティブ経験(0-6点)	.568 ***	.086	1.765
居場所	.559 **	.207	1.749
家庭SES	-.503	.311	.605
疑似決定係数(Nagelkerke)	.157		
N	773		
*p<.10, **p<.05 ***p<.001			

図表 6-15 やりとげる力を従属変数としたロジスティック回帰分析

	小4		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-1.999 ***	.413	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.480 *	.219	1.617
文化経験(1年1回以上)	.492 **	.179	1.635
ポジティブ経験(0-6点)	.435 ***	.070	1.544
居場所	.554 ***	.157	1.740
家庭SES	-.273	.268	.761
疑似決定係数(Nagelkerke)	.112		
N	1230		
*p<.10, **p<.05 ***p<.001			

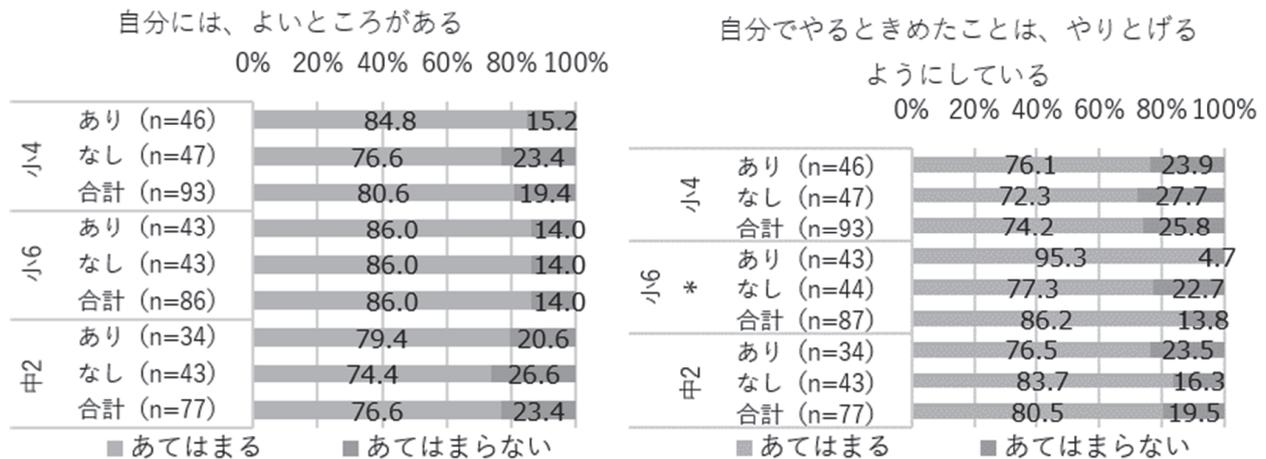
	小6		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-.558	.398	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	-.044	.200	.957
文化経験(1年1回以上)	.105	.181	1.111
ポジティブ経験(0-6点)	.379 ***	.074	1.461
居場所	.245	.179	1.278
家庭SES	.431	.352	1.539
疑似決定係数(Nagelkerke)	.055		
N	1094		
*p<.10, **p<.05 ***p<.001			

	中2		
	係数	標準誤差	オッズ比
切片	-1.227 **	.406	
習い事(通塾以外全て) 1つ以上	.459 *	.193	1.583
文化経験(1年1回以上)	-.046	.190	.955
ポジティブ経験(0-6点)	.454 ***	.082	1.575
居場所	.265	.200	1.304
家庭SES	-.027	.317	.973
疑似決定係数(Nagelkerke)	.102		
N	774		

*p<.10, *p<.05 **p<.01 ***p<.001

以上で本章の主たる考察を終えることとするが、付論として地域での居場所が体験格差の緩和にもたらす可能性を検討したい。図表6-16は家庭SESが1の層において「自宅や学校以外の場所で、子どもが本を読んだり、みんなで遊んだりできるような場所」の利用経験を保護者に尋ねた結果と子どもの自己肯定感、やりとげる力をクロス集計したものである。利用経験が「ある」と答えたグループを「あり」とし、

それ以外は「なし」とした。自己肯定感、やりとげる力はこれまで同様二値に縮減した変数である。有意な結果として得られたのは、小6においてこうした場所を利用しているグループが「やりとげる力が高い」ということである。サンプル数が限られているため統計的分析として難しいところもあるが、質的な調査研究も含めて、研究課題として興味深いものである。



図表6-16 「自宅や学校以外の場所で、子どもが本を読んだり、みんなで遊んだりできるような場所」の利用の有無と自己肯定感、やりとげる力 (SES1のみ)

6. まとめ

以上、本章では体験格差を背景に、習い事や文化経験といった体験の状況やそれらが学力や非認知能力に与える影響を分析してきた。SES等様々な社会的背景を考慮したとしてもこうした体験そのものが、子どもたちの学力や非認知

能力など、広くいえば成長にプラスの影響力を持つのではないかとというのが本章の結論である。このような体験の場をどれだけ多く持てるかが、子どもたちにとって重要なことである。

ただし、本章の分析では体験について習い事や文化経験に限定しており、その他の体験については取り上げていない点が課題として残され

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅱ

ている。また、家庭 SES1 の回答が相対的に少ない点も分析上の課題である。しかしながら次年度も同様の調査を継続する予定であり、回答における SES の割合の補正を模索しつつ、たとえ限定された体験であってもパネルデータとしてより長期の影響を確認することが期待できることもまた本章を閉じるにあたって記しておきたい。

【参考文献】

- 今井悠介, 2024, 『体験格差』講談社.
- 株式会社浜銀総合研究所, 2021, 「令和2年度「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書」(文部科学省委託調査). https://www.mext.go.jp/content/20210908-mxt_chisui01-100003338_2.pdf
- 文部科学省, 2021, 「「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」リーフレット」https://www.mext.go.jp/content/20210908-mxt_chisui01-100003338_1.pdf
- 小塩真司, 2021, 『非認知能力——概念・測定と教育の可能性』北大路書房.